雷氷の悪魔祓い

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雷氷の悪魔祓い

【Ｎコード】
Ｎ７４１７Ｚ

【作者名】
ハル

【あらすじ】
非日常を望んでいた高校一年生の高橋雷斗は、夜中に謎の女の子の氷華に出会い、悪魔と契約させられてしまう。氷華に振り回されながらも、悪魔祓いと青春の学生生活の両立を目指して頑張る話です。予定ではファンタジーと学園の複合型のようなものを目指してます。最後に、文章が下手くそで読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。

運命の出会い

「やっぱり、こういう非日常って憧れるよなぁ」
ベッドに寝転がりながら、漫画を読み進める。

「って、勉強の休憩で漫画読み始めたら、もう5冊も読み返してしまった。明日の小テストどうしよっかなぁ……、まっいっか」

ハッと気づくがもう遅い。
もうそろそろいつもなら寝る時間なので、寝てしまおう。
と思い、ベッドに入ろうとした時だった……。

ドーーン

「な、何だ!?」
大きな音に驚いて、辺りを見渡してみるも、何もない。

「かなりデカイ爆発音みたいなのが聞こえた気がしたんだけどなぁ」
少し気になりながらも、眠ることにした。

ドゴーン

「やっぱり、何かある…よな」
二回も音を聞いたので、聞き間違いではないと確信する。

とりあえず外を見てみるか。
と思い、窓から外の様子を確認する。

「喧嘩…にしちゃやりすぎだよな」
家の前は公園になっているが、その公園で女の子と男が刀を持って喧嘩していた。
「警察に通報…いや、止めに行った方がいいかな」
念のために金属バットを持って行く。
夜の0時を回っていたので、家族は寝ていて、すんなり脱走でした。

「おい、何してるんだ」
女の子と男が俺の声に反応して、俺の方を見る。
「えっ、もしかして見えてるって言うの？」
女の子は癖のない肩まで伸びた茶色の髪に、大きく開いた翡翠色の目、さらにそれらを引き立てるかなり整った容姿が特徴的だった。
ただ…胸がないのが残念だ。
女の子は俺のことを見るなり、驚愕の表情になる。
それとは逆に男は口元を吊り上げて、不気味な笑みを浮かべる。
「あぶない、逃げて！」
女の子の声に反応するが、男は一瞬で俺の目の前まで詰めていた。
「なっ！？」
分かった時にはもう遅い。

殺される

そう思い、無意識に眼を閉じる。

自分に何かがかかるのを感じる。

だが、自分の体に痛みは全くない。

恐る恐る眼を開き、何が起こったのかを理解する。

女の子が俺を庇って斬られたのだ。

「な、んで？」

「勝手に…体…が動いちゃ…ったのよ。それ…より、逃…げて」

所々途切れながらも、女の子は確実に伝える。

「バカヤロー、俺の代わりにやられた女の子を見捨てて逃げられるかよ」

「な…によ、それ。でも…、いいわ。…あ…んたが…戦い…なさい」

「分かった。でも、どうすればいい？」

女の子がニヤッと軽く笑うが、そんなのは気にならない。目の前で女の子が死に掛けているんだから。

「フェル…時間…かせいでで」

『わかった』

女の子が持っていた刀が輝き、光の粒子が集まって、犬のような姿になる。
散々驚きすぎて感覚が麻痺しているのか、俺はほとんど驚かなくなっていた。

フェルと呼ばれた犬はまっすぐ男に向かっていき、その周囲の温度が下がる。
男はフェルを殺そうと斬りかかるが、全て紙一重でかわされる。

「じゃあ、…今から…召喚の…儀式を…するわ」

「召喚？いったい何を召喚するんだ？」

「悪魔よ」

その言葉を聞き、俺は言葉が出なかった。
宗教とかそんなものだろうと思ったが、この女の子が死に掛けの状況で冗談が言えるほど、愉快な性格をしているようにも見えないのだ。

「そんなもの…どこから召喚するんだ？」

「ここと は別の悪魔の世界。なら、さっさと始めるわよ」

女の子の声が突然途切れ途切れから、ハッキリしたものになる。
そこに多少の違和感を感じたが、今の状況ではどうでもいいことだろう。実際に目の前の女の子は血だらけなのだから。

「分かった」

自分で思うが、どうしてこうなったのだろう。
自分が非日常を望んだからだろうか。
そうであったなら取り消したい。
面倒なことに巻き込まれて死ぬのは嫌だ。
でも、自分を庇って傷ついたこの子を今守れるだけの力は欲しい。

『我、世界を繋ぐ者。汝、我が呼びかけに答え、世界を渡れ』

女の子の目の前に光の粒子が現れ、一つに収束していく。

俺と女の子の目の前に現れたのは白い猫だった。

『俺を呼んだのは、お前か？』

「はい。でも、契約するのはコッチです」

女の子が俺を指差し、猫も俺の方を見る。

『何のために力を望む』

「…今、護れるだけの力が欲しい」

俺がそう言うと、猫は軽く笑う。

『面白そうな奴だ。暇つぶしに契約してやる。右手を出せ』

恐る恐るながらも、言われた通りに右手を出す。

「おわっ！」

猫が再び光の粒子になり、それが右手の中指に収束し、光が収まればそこには金色の指輪がはまっていた。

「な、何で指輪が」

『これで契約は完了した。じゃあ、また変化するからな』

「えっ！？」

聞き返した時にはすでに遅く、指輪がまた光り、細長い形になり、それを掴むと刀身が銀色の美しい刀になっていた。

「もうツッコミはやめるから聞くけど、次はどうしたらいいの？」

『俺は悪魔だからな。人間の感情、想いを食って力にする。お前の怒りや、恐怖と言った感情、誰かを護りたいといった強い想いを込めてみろ。そしたら自ずと反応する』

言われた通りに、想いを込める。

自分を護って傷ついた女の子を護りたいと思う強い想いを。

バチバチ

刀身に雷が走る。

「うぉっ！」

突然のことだったので、声を上げて驚いてしまう。

『小さな動作は俺がアシストしてやるから、叩きつぶしてこい』

「分かった」

フェルと男が戦っているところまで一気に駆けていく。

「フェル、戻って！」

『了解』

女の子が右手を突き出すと、少し距離があったが、フェルが粒子になり、女の子の指に銀色の指輪として収まる。

「おーりゃあ」

剣道とかの心得はないので、刀を振っても完全な我流だ。
我流ゆえに相手にかわされてしまう。

『想いを込めて、『雷閃』って叫べ』

「くっそっ、『雷閃』」

横に振った刀はまたしても男に当たることはない。

だが、先ほどとは違う結果があった。

刀の軌道上から雷の斬撃が飛び出し、男は持っていた刀で防御しようとするが、その防御を通り抜けて、その胴体を真っ二つにしてしまう。

「お、俺、人、殺しちまった」
予想外の結果に慌ててしまう。
男は俺を殺そうとしてた。
殺さなかったら殺されてたかもしれない。
でも、殺すことを前提にした攻撃をするのと、殺さないと思って攻撃して結果殺したのとでは、精神的にずいぶん違う。
「やったのね」
女の子が俺の方へ駆け寄ってくる。
だが、さっきと少し違う。
「あっ、怪我が無くなってる」
「あぁ、それならもう治療したから大丈夫」
いったい何のために戦っていたのだろう。
「じゃあ、怪我もないなら、俺はもう帰るから」
じゃあ、と言って立ち去ろうとする。
「ちょっと待った！」
「な、何？」
嫌な予感がしたので、恐る恐る聞いてみると、やはり嫌な予感は的中していた。

「あんた、あたしのパートナーにならない？」

「はぁ！？」

俺の意識はそこで途切れてしまうのだった。
最後に思ったことは、何だ夢か。だ。
だが、今日と言う日がこれからの運命を変えてしまったことには、
まだこのときは知る由もなかった。

運命の出会い（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

転校生

「やっぱり夢か」
俺はベッドから起きると共に、大きく伸びをすると、思いがけない声がかけられる。

『やっと起きたか。そういや自己紹介がまだだったな。俺はペンケレ。お前は？』

「じゃあ長いからペケな。俺は高橋雷斗（たかはしらいと）。ってか、何でいんの？」
ペケは一瞬呆れ顔になりながらも続ける。

『まぁ好きに呼べばいい。俺はライトって呼ぶからな。何で居るかって、そりゃ、契約したからに決まってるだろ』

「やっぱり夢じゃなかったんだな」

『まぁ、俺がここにいるのが証明だしな』

何か目の前にいる猫に偉そうにされると、イラッとくるなぁ。

「何で指輪じゃないんだ？」

『戦う時はイメージ通りの武器になるし、人が多いとこでは指輪、人がいなかったら、この姿になるからよろしくな』

「何か…悪魔って自由だな」

ペケは、何も分かってないのかとも言いたげな目で俺を見てくる。
俺は悪魔じゃないんだから、知る由もないだろうに。
『いいか、悪魔ってのは我慢することがない。言わば、欲に忠実に生きてるんだ。何故自由なのかって聞くのは、太陽って何故東から昇るのかぐらい常識だぞ』
「あぁ、それは…悪かった」
『分かればいいんだよ。それより腹減ったから、何かくれよ』
「俺も腹減ったけど、キャットフードとか無ぇしなぁ。ペケは好きな食べ物とかあるのか？」
ペケは考えるような仕草をしてから、思いついたように答える。
『ウインナー。あと俺は猫じゃない、虎だ』
「おいペケ、魚と思わせての、猫がウインナーってのは百歩譲って良しとしよう。だが、虎と言うには無理があるぞ」
『俺はホワイトタイガーがモデルだ！デカいと不便だから、小さくしたんだよ』
俺は信じられないと言いたげな視線をペケに送り続ける。
『もういい。とりあえずウインナーくれよ』

「分かったから、機嫌直せよ」

『ふん』

『ここが学校か』

ペケは指輪になっているので、頭の中に直接語りかけてくる。

「猫になったらペケは追い出されるから、絶対そのままでいろよ」

『うむ、あえてやってみたい気がするぞ』

「絶対、猫になんなよ」

『それは振りか？』

「ちげぇーよ！」

1人で喋ってるからか、廊下を歩いてる他の生徒から避けられていた。

「お前のせいだからな。今日はウインナー抜きだな」

『それは勘弁してくれ！』

ペケの必死の願いに、つい許してしまった。

「では、突然だが今日は転校生の紹介をする」

ふーん、転校生とか関係ないな。
どうせ、喋る気ないし。
挨拶もスルーだな。

「高橋氷華です。そこにいる、雷斗の従兄妹です。よろしくお願いします」

ガタン

「おーい、高橋大丈夫か？」

あまりの不意打ちに驚きすぎて、椅子から転けてしまった。
こんなの、今時じゃ『新婚さんいらっしゃい』でしか見れないぞ。

「あっ、はい。大丈夫です」

言いながら、氷華と名乗った女の子を見ると、全てを思い出す。
あっ、記憶喪失設定とかなかったからね？

昨日、公園で会って、俺を非日常に連れ込んだ張本人だった。

「雷斗、昨日はありがとね。いろいろと」

含みある笑顔で言う氷華から、一瞬で俺にクラス中の視線が刺さる。
主に男子は、このままじゃ視線だけでなく、別の金属体で刺されそ

うな気もする。

「転校生のあの子と、どういう関係か、嘘偽りなく正直に答えろ。場合によっては…分かってるな？」

話しかけてきたのは、後ろの席の重吾だ。席が前後なので仲良くなった。

「別に、どんな関係でもない」

はずだ。俺の記憶の中では、何もなかった。

「雷斗はそんなこと言うんだ。あたし達、一生共に寄り添う仲じゃない。昨日の夜は遊びだったの！？」

女子がコソコソと話し始め、男子はよく分からない言葉を叫んでから、視線だけで人が殺せそうなぐらい睨んでくる。

「なっ！？俺はそんなこと知らねぇぞ」

「知らないって……、あの子はどうなるって言うの？まだあんなに小さいのに……」

クラスからの視線が先ほどよりも厳しくなる。

今の心境だけで自殺ものだな。

「冗談よ」

軽く笑いながら氷華は言うが、俺の中では冗談のレベルを越えていた。
できれば二度と関わりたくない。
「でも、従兄妹ってのは本当。下宿先の家に行ってみたら、あんたの家だったから焦ったわ」
そう言う氷華は全くそんな表情ではない。
おそらくは、俺の家に住むってのは本当だろう。
「あんの糞親が」
こんな存在自体が悪魔みたいな奴が住むのわ承認したとは許すまじ。
「まぁまぁ、良い両親じゃない」
そう言って氷華が座るのは、俺の斜め後ろで重吾の隣だった。
そして、何も言わなくても分かってしまった。
氷華がいる日常は、それだけで全て非日常に変わってしまうと言うことに。

転校生（後書き）

今日、もう一話投稿予定です。
予定では２０時ぐらいに

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

悪魔のこと

いろいろあったが、今日も学校が終わったので、とりあえず家に帰る。
自分の部屋に入って、ひとつの異変に気づく。

「どういうつもりだ？」

「何が？」

氷華を問いただすが、氷華は何のことか分からないといった表情で返す。

「だ・か・ら、何で俺ん家なんだって言ってんだよ」

「従兄妹だから。他に理由があるとすれば、あんたがあたしのパートナーになるから」

「俺は従兄妹がいたなんて初耳だ。あと、パートナーは嫌だ。」

「まぁいろいろ事情のある家庭だからねぇ。あと、パートナーは申請しといたから、拒否できないわ」

そういって氷華は一枚の紙を見せてくる。
コピーみたいだが、発行元は聞いたことない名前の協会なのだ。

「……協会ってことはシスターさん？」

「あたしはシスターじゃなくて悪魔祓い、つまりエクソシストの類よ」

「あぁ、協会だから悪魔祓いね、納得」

「人事みたいに言ってるけど、あんたも悪魔と契約したんだから、所属することが強制的に決まってるんだから」

お前が召喚して、契約させたんだろうと言えば、うるさそうなので黙っておく。

「…ちなみに拒否すれば？」

「『堕天』ってことで殺されるわね」

今、かなり恐ろしいこと言ってるんですけど……。

「天使じゃないのに、『堕天』って何故に？」

よく分からないツッコミをしてる俺も俺だな。

「『堕天』ってことは悪魔に堕ちたってことらしいから、いいんじゃない？」

「まっ、いいか」

そんなことはどうでもいい。それが共通語なら、俺だけ別の呼び方で呼んでも不便なだけだ。

「昨日の…あの人は？」

「あれも堕天。感情を全て悪魔に喰べられてる」

「感情を喰べられる…って何だ？」

氷華が大きくため息をつく。
説明がめんどうなんだろうか。

「悪魔は人の感情や想いなんかを喰べるの。人間は悪魔に餌を与える代わりに、悪魔の力を借りてる。でも、悪魔が感情を全て喰べ尽せば、その人間の肉体を手に入れることができる。悪魔は召喚しないと来れないから、体を乗っ取らないと自由に行動できないの。で、悪魔の力にもよるけど、実態化して自分で行動できる時間はだいたい１０分程度なの」

ここまではいい？と聞いてくるが、理解できても納得はできない……。
非日常すぎて、俺じゃついていけそうにないです。

「でも、ペケは人がいなかったら１０分以上も猫の形態だぞ」

『俺は特別だからな』

ペケが何か言っているが、無視しておこう。
あとでウインナーでもあげれば機嫌はよくなると思うし。

「たぶん、その猫の姿も一つの形態だと思うわ。あたしのフェルも元はもっと大きいけど、大きくて邪魔だから小さい形態になってるし」

「ペケもデカくなれるのか？」

『なれるけど、疲れるらしいから嫌だ。この方が楽だ』

悪魔ってのはどこまでも自由だな、おい。

「まぁ、いいや。でも、ペケはなんで小さくなれるんだ？」

『ん？俺はただ俺が小さい時の体になってるだけだから、特に理由はない』

「普通の悪魔は産まれた時から、ほとんど成体と変わらないんだけどね。体が成長する悪魔は、上位種で、どんどん力に慣らしていかないと体が耐えられないらしいわ。だから、ペケちゃんもフェルも上位種ってこと」

勝ち誇ったかのような顔で氷華が言ってるので、こっちはスルーしておこう。

「へぇ～ペケって凄かったんだな」

『ずっとそう言ってただろ』

「比較対照がなかったから、凄いのか分からなかったんだよ」

ペケと言い合っていると、氷華が身を乗り出してくる。

「で、あんたはあたしのパートナーになって、一緒に悪魔祓いをするのか、組まないで殺されるのとどっちがいいの？」

究極の選択だな。

「……ああ、もう分かったよ！やりゃいいんだろやりゃ」

「分かればいいのよ」

「でも、何でお前は今までパートナーがいなかったんだ？」

「……人数の関係上……仕方なかったのよ」

あぁ、人数が奇数だったからパートナーを作るに作れなかったのか。
何か可愛そうだな……。
友達いるのか気になるが、地雷踏みそうなのでやめておこう。

「まぁ、やるのはもう決まったからいいとして、街中で戦って見られたらヤバイんじゃないのか？」

「そのへんは大丈夫よ。悪魔を武器形態にしてる時は、自分に悪魔の力が流れてくる。つまり一般人には見えてないから」

「俺は見えたけど、それは何でなんだ？」

氷華は考えこむような仕草をするが、正直キャラ的に似合ってない。

「見えるあんたが異常なの。たぶん、特別な力があるか、運命ね」

氷華と出会う運命だと思うと嫌だなぁ。
可愛いけど貧乳だし、状況が俺には荷が重過ぎる。

「何か失礼なこと考えてない？」

「いえ、何も。気のせいではないでしょうか」
「そこまで否定するとこが怪しいけど、まぁいいわ。とりあえずあんたを鍛えないとね」
鍛えるって何するんだろうか。できれば、楽そうなのでお願いしたい。
「何するんだ？」
「強くなるには、やっぱり、実践が一番」
ていうことで、と氷華が続け、
「しばらくあたしは見てるから、あんたが堕天を倒しなさい」
嫌だ、そんなの、めんどくさい。
と言おうとすると、氷華が何かを感じたのか、勢いよく右を見る。
「ここから４時の方向に距離は５００ｍ。急いで用意しなさい」
用意するものはなかったので、とりあえずペケを指輪にして準備完了。
「行くわよ」
はぁ、めんどくさい。
でも、引き受けたししゃあねぇか。

悪魔のこと（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

堕天との戦い方

氷華に付いて行き、けっこう大きな河川敷に付いた。
夕方なので子供などはいなく、近くを学生や、ペットの散歩をさせてる人がちらほらいる。

「普通の人に見えるんだが」

「見た目はね。でも中身は悪魔に乗っ取られてる」

俺が言うと、氷華はこちらを見ずに答える。

「悪魔にって、そんなに簡単に乗っ取られるものなのか？」

「悪魔は心の隙に入り込んできて浸食していくの。あたし達みたいに自分から契約する人もいるけど、大きなショックを受けた時は悪魔に乗っ取られやすいわね」

大きなショックとは、失恋、人間関係などいろいろあるだろう。

「悪魔に種類はあるのか？」

「たしかにあるにはあるわよ。契約するような悪魔には、それぞれの属性や能力があるわ。人を乗っ取るようなのは、憤怒、嫉妬、強欲、色欲、暴食、怠惰、怠慢のそれぞれ七大罪の王がいて、その眷属かフリーかね」

「七大罪ってどうやって分けるんだ？」

「憤怒の王は人の憤怒の感情しか喰べないし、嫉妬の王は嫉妬の感情しか喰わないの」

へぇ〜っと感心したような声をあげて、俺は気になったことを聞いてみた。

「他の悪魔は全ての感情を喰うのに、王は一部なら、王って悪いけど、そこまで悪くまいんじゃ」

「でも、王は足りない分は他の人間を襲って喰べるから、被害者が多いのよ。普通の悪魔による被害者を1人とすれば、王クラスだと１０００ってとこかしら」

「王さんまじパネェっす」

驚いている俺に、氷華はため息をついて話し始める。

「あんたのペケちゃんも実力的には王クラス。で、ペケちゃんはあんたから喰べる感情や想いの量は、極力抑えて普段と変わらないぐらいしか取ってないの。その分ペケちゃんはどこからエネルギー補充してると思う？」

本気で分からないので、悩んでいると、氷華はまたため息をついて続ける。

「他の悪魔を倒した時に、相手から奪ったり、人間と同じように食べ物で摂取してるの。だから、あんたはペケちゃんに感謝しなさいよね」

もともとお前が契約させなきゃ、こうならなかった、と思うが言っ

たら面倒そうなので黙っておく。

てか、ペケのウインナーの暴食ってそんな意味があったのか。

「これからはもっとウインナーやるようにするよ」

「それでいいのよ」

氷華は勝ち誇ってるのか、少し喜んでいる。

「てか、思ったがあの堕天って、人を襲ってないが、それでも殺すのか？」

「今は襲ってないけど、しばらくしたら襲うわ。感情がもの凄いスピードで喰べられてる。あのままじゃ、もうじき乗っ取られて、殺すしかなくなるわ」

「ってことは、今なら助かるのか？」

「もう手遅れよ。目の前で浸食が始まらないと、心のどこかしらに障害が残るわ」

悲しそうに言う氷華は、昔にそれで助けられなかったかのような、表情をするので、何も言えなかった。

「…今こんなこと聞くのもって思うけど、今にしか聞けそうにないから聞くけど、堕天を助けるにはどうすればいいんだ？」

「攻撃すればいいわ」

「えっ？でも、それじゃあ傷つけちゃうんじゃ」

「あんたバカ？悪魔に完全に乗っ取られてなかったら、まだ悪魔は人間の体ってわけじゃない。ペケちゃんとかフェルの武器は悪魔にしか効かないの」

「それって……人間にやったらどうなるんだ？」

「悪魔の武器を使う時は、自分も悪魔と一体化してるから悪魔に攻撃できる。一体化したら、建造物や人間には触れない。つまり、攻撃もすり抜ける。だから、完全に乗っ取られてなかったら、悪魔だけを攻撃したことになるの」

分かった？と氷華は続けてくる。

正直な話、話が長いです。途中から聞く気が半分失せましたよ。

「まぁ、何とか」

返事を濁らせて、この場は保留しておく。

「じゃあ、行くわよ。助けるにも、殺すにも、攻撃しなきゃいけないんだから」

氷華が飛び出していく。

「フェル」

『行くよ』

氷華の指輪が光り、氷華の手に形を持って収束していく。

現れたのは白い大鎌だった。

俺も本物は一度も見たことはないが、見ただけで分かるのは、それが大鎌だと言うこと。

「今回はあたしが手本を見せてあげる」

相手の堕天はロングソードを持って応戦する。

氷華は堕天の攻撃を全て、無駄の無い動きで余裕を持ってかわす。

素人から見ても氷華が強いのはすぐに分かる。

それほど圧倒的だった。

「まず大事なのは、どんな攻撃でも反応できること。そして、相手の次の攻撃を予測すること。まぁ、これは経験でどうとでもなるわ」

堕天が悔しさを分かりやすく表情に表して、距離をとる。

ロングソードが光りを帯びて、堕天はその場でロングソードを振り回す。

目には見えない何かが、飛んでるのだろうことは、俺でも分かった。

「氷柱」

氷華が呟きながら大鎌を左から右に振る。

その瞬間に氷華より少し前の方で、直径２ｍほどの氷柱が何本も現れて、見えない攻撃を防ぐ。

またしても堕天は悔しそうな表情をして、何度も衝撃波か鎌鼬か分からない技を繰り出す。

「その次に大事なのは、耐えて一瞬の隙を見逃さないこと。弱い悪魔は子供みたいなもの。負けず嫌いで、防がれたら何度も同じ技を使ってきて、耐えた分だけ隙も生まれやすい。まぁ上位の悪魔にもなると話は別だけどね」

そう言って氷華は氷柱を何重にも重ねて、防御姿勢をとっている。

堕天は一撃に全てを込めようとしたのか、大きく振りかぶり、隙が生じる。

「ここ」

「氷狼」

氷華が大鎌を振ると、大型犬よりも二回りほど大きい、氷の狼を作り出す。

狼が一気に駆けて行き、堕天の頭に勢いよく噛みついた。

氷狼の一撃で首の無い堕天は力無く倒れ、光になって消えていく。

「すげぇ」

戦いに見入ってしまっていて、無意識に呟いていた。

「まぁ、こんな感じだから、あんたも頑張りなさいね」

「できるわけないだろうが！」

突然叫びだしたので、氷華は一瞬ビクッとしてしまう。

「あたしが特訓してあげるじゃない」

「優しくお願いします」

いきなり本気でやりそうなので、心からお願いする。

「うんうん」

氷華は俺の態度に喜んでいるが、納得はしないだろう。

氷華といる時間はまだ短いけど、気付いたことがある。

氷華（こいつ）といると退屈しない人生を過ごせるだろう。

堕天との戦い方（後書き）

なんかお気に入り数とか増えてたんで、更新します！

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

自宅にて

「氷華、お前は何故この家にいるんだ？」

俺が家に帰ると、そこには氷華がいた。

「ここにしばらく住むんだから、ここがあたしの家になるのよ」

「それは理解してはいるが、納得してないぞ」

我が家の食卓に普通に氷華がいたのだ、驚くなと言う方が無理な話である。

「雷斗、父さんはな、父さんはな、可愛い娘がもう1人できたかと思うと、嬉しいんだ。それなのに、お前ときたら、氷華ちゃんに向かって何て口の聞き方だ」

「おい、親父、少し黙ってろ。剥ぐぞ」

親父が自分の体を腕で隠す。

そんな女の子っぽい仕草をしてもキモイだけだと何故気づかん。

「剥ぐって何をだ？父さんが雷斗に……キモッ」

「おめぇの妄想の方がきめぇよ。剥ぐってのは、皮膚のことだよ」

「父さんはな、父さんはな、お前をそんな猟奇的に育てた覚えはないぞ」

「うん、まともに育てられた覚えがねぇからな」

そう、俺の家には少し複雑な事情があったり、なかったりするのだ。

「わ、わたしはお兄ちゃんになら、いいよ」

我が妹が顔を赤くしながら何か言っているが、聞いてはいけない気がするので、完全スルーモード展開中だ。

「で、氷華、お前はどこで寝るんだ？」

「あんたの部屋の押入れで、某猫型ロボットみたいに寝るわよ」

「それなら氷華ちゃん、母さんの部屋を使えばいいじゃ」

この親父は何を言い出すのだ。母さんは１０年前に死んだ。だが、それから掃除はするものの、ずっとそのままにしておいた母さんの部屋なのに。

「雷斗、お前の言いたいことは分かってる。でもな、いつまでも過去に囚われてるわけにもいかない。雷斗には悪いが分かってくれ」

「それくらい…分かってるよ」

「んじゃ、氷華、飯食ったら母さんの部屋に案内するけど、荷物とかはどうしてるんだ？」

「あんたの部屋」

あぁ、ちゃんと持ってきてたんだな。なら安心。できるわけがない。あそこには俺のコレクションが……。

「あぁ、そうか。……って、えぇ！？俺の部屋に入ったのか」

「３０分ぐらいだけどね」

「なげぇよ」

氷華ならやりかねそうで怖い。

「それで、何か見つけたりしなかったか？」

「えっ？うーーーん、本棚のエロ本を隠すために二重にして奥に隠してたり、ＰＣでいかにも普通そうなフォルダ名に大量のアダルトな画像が入ってたり、ジャズのＣＤかと思わせて中身はＡＶだったり、なんてのは見つけてないから安心して」

「もうやめてくれーーー。心の傷を抉らないでくれ。ほら、雫の教育に悪いだろ？」

「ふーん、お兄ちゃん、わたしと言うものがありながら、そんなものの見てたんだぁ」

雫の目が笑ってない。殺されそうで怖いぞ、その目は。

「実の妹にそんなもの見られたら自殺ものだからな。俺はそんなものは持ってない！」

「お兄ちゃん、わたし達は義理の兄妹なんだから、お兄ちゃんがそ

んなこと気にしなくても結婚できるよ」

「義理でも何でも、ずっと一緒に住んでたんだから、家族なのには変わらないだろっ！」

俺のセリフに親父は目を潤ませながら、見てくる。何か鳥肌立つからやめてほしいんだけどな。

「父さんはな、父さんはな、雷斗、お前にそんなふうに言って貰えて嬉しいぞ」

「あー、分かったから。とりあえず黙って、泣き止め、キモイから」

「分かってる。これが世に言うツンデレってやつなんだな」

「親父にデレた覚えはねぇし、俺はツンデレじゃねぇ」

親父は最近、中途半端にネットの言葉を覚えて、無駄に使いたがるから、扱いが日々めんどうな方に進化していく。

「お兄ちゃん、わたしにそんなこと言うんだぁ」

雫は何故持ってるのか分からなくが、ポケットから裁ちバサミを取り出してチラつかせている。

「えーっと、雫さん？その物騒な物はしまってくれるとありがたいんですけど……」

雫は満面の笑みを浮かべる。

「お兄ちゃんの態度次第かな」

「雫さんまじパネェっす。その可愛さにいつも魅了されております」

「仕方ないから許してあげる」

俺は内心ホッと胸を撫で下ろす。

「あっ、でもお兄ちゃん、お兄ちゃんの隣の席のあの女とはあんまり喋らないでね。今日の休み時間ので、１０回もお兄ちゃんの声を聞いてるなんて、あの女生意気。しかも席替えしてから４ヶ月と１８日経つけど、お兄ちゃんと１７３回も会話してるなんて許せないよね、お兄ちゃん」

「ど、どうして雫は…そんなこと把握してるんだ？」

俺の顔が真っ青になる。触れてはいけないものに触れてしまったかのようだ。

「やだなぁ、お兄ちゃん。兄のことを知るのは妹として当然じゃない。会話もぜーんぶ聞かせてもらってるんだから」

そう、我が妹の雫は、若干ヤンデレが入っているのだ。

それにしても、どうやって聞いているんだろうか。

俺は2年のクラスで、雫は1年のクラスだからフロアが違うから聞きようがないと思うんだが……。

まさか、あいつまたやりやがったのか……制服のクリーニング前は

俺の制服を持っていくと思ったら、このためか。
雫のやつ、俺の制服に盗聴器しかけやがったな。
昔、それでクリーニング店から電話があったから徹底させてきたのか。

それからもいろいろあったが、無事に夕食を食べ終える。

夕食後に約束通り氷華が俺の部屋にくる。

「あんたの妹って……怖いわね」

「……そうでもないぞ」

一瞬の間があったが、そう答えておかないと怖いのだ。

そして、近くにあった紙に、文字を書いてみせる。

俺の制服に盗聴器がしかけられてる。この会話も聞かれてるかもしれない。

瞬間、氷華の表情が青ざめる。

「そ、そうなんだ。そういえば、義理って言ってたけど、どういうこと？まぁ答えたくなかったらいいけどね」

「まぁ、いいさ。俺が母さんの連れ子で、雫が父さんの連れ子。それで俺の母さんは１０年前に死んで、それから俺の家族に血のつながった人間はいないだけだ」

「なんか…ごめん」

「別にいいさ」

少しの間沈黙が流れるが、それほど居心地の悪いものではない。

「じゃあ、母さんの部屋に荷物運ぶぞ」

「あっ、うん」

それから昔から変わらない母さんの部屋に荷物を移動する。

自宅にて（後書き）

急遽、妹をヤンデレ妹にしました。

ヤンデレ難しい！

まぁ頑張ります。

誤字・脱字・質問があれが感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7417z/

雷氷の悪魔祓い

2011年12月29日12時48分発行